

## 参加型勉強会実施を試みて

～参加型勉強会を実施することによる意欲変化のアンケート調査より～

B棟5階 ○前田真穂 岡本施津子

### <はじめに>

今まで当科の勉強会を振り返ると、そのほとんどが主催する側が主体となっていることが多く、参加者は座って聞くだけという講義型スタイルであった。そのため聞き流していることが多く実際の看護ケアに生かすことができていなかったのではないかと疑問に思った。そこで主催者側は学ぶ側が自分の持っている知識を最大限に使い、それを引き出すことが出来る、参加者主体の勉強会（以降参加型勉強会）ができないだろうか考えた。

聞くだけでなく実際にアクティビティを取り入れながら勉強会を行うと勉強した内容をイメージ化しやすくまた頭に残りやすい。そのため日々の看護ケアに活かしやすいのではないかと考え、参加型勉強会を主催し、意欲変化に対してのアンケート調査を行った。結果、学習意欲の変化がみられ、また参加型勉強会の利点・欠点、今後の課題が見つかったのでここに報告する。

### <目的>

・参加者主体で勉強会を行い、体験やディスカッションを通しながら他のスタッフと意見交換、知識の共有を行い、日々の看護ケアに活用する。

・参加型勉強会を実施することで、個々の学習意欲がどのように変化したかを知る。

### <方法>

1. 期間：平成23年10月28日～11月29日
2. 対象：B棟5階 看護師 のべ35名
3. 勉強会内容：期間中に勉強会を5回実施  
1回目：「死の体験」CDレコーダー、カードを使い死にゆく人が死ぬまでに何を失っ

ていくのかを自分に置き替えながら考え体験する。

2回目：「救急カート・常備薬品について」模造紙に実際の救急カートと常備薬品のケースを書き、パズルゲームを使ってグループ毎にそれぞれの中身の配置図を完成する。

3回目：「挿管の介助の方法」挿管までに至るシミュレーションを設定。実際に物品を使い、物品の目的を説明してもらいながら、介助の方法を練習する。

4回目：「脳血管について」血管の走行を略語、日本語を踏まえながら、血管ぬりえを使いグループでディスカッションしながら血管の走行を知る。

5回目：「業務内容の振り返り」統一されていなかった日々の業務の手順を20項目ピックアップし、個々で解答してもらった後全員で答え合わせする。

4. アンケート内容：参加型勉強会に参加することで内容のイメージ化や、他の参加者との意見交換、知識の共有ができたかどうか、学習に対する意欲の変化等について計4項目のアンケートを、各勉強会終了後に対象者に配布した。

5. 分析方法：単純集計

6. 倫理的配慮：協力は自由意志であり、結果は個人が特定されず、研究目的以外では使用しないこと、アンケートの結果は結果がまとまった時点で消去・破棄する。また同意はいつでも撤回でき不利益が生じることはないと説明した。以上の内容は当院看護部・看護研究倫理委員会で承認を得た。

<結果>

アンケートの配布はのべ35人、回収率100%であった。

①勉強会内容のイメージ化は「できた」16人

「まあまあできた」17人

「あまりできない」2人 (図1)

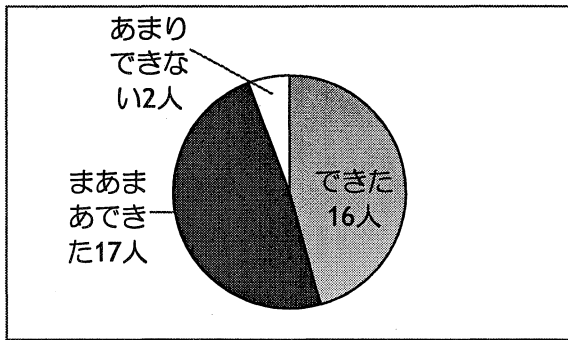


図1 勉強会内容のイメージ化

②他の参加者と意見交換や知識の共有「できた」32人

理由→先輩の意見がきけた、話しやすい環境で発言しやすかった、他の人と知識が共有できた。

「できなかった」3人 (図2)

理由→事前学習不足・特定の人しか発言しない・緊張する。

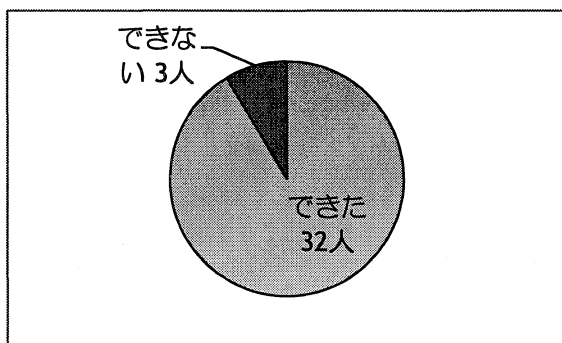


図2 意見交換や知識の共有

③勉強会に対する意欲は「でた」20人

「まあまあでた」13人

理由→アクティビティすることで印象に残りやすい・眠たくなならない・経験、体験することで勉強する意欲がわく・体験する事でイメ

ージしやすかった・わかりやすかった。

「あまりでない」2人 (図3)

理由→事前学習しなければできない・グループによっては発言できない・緊張する。

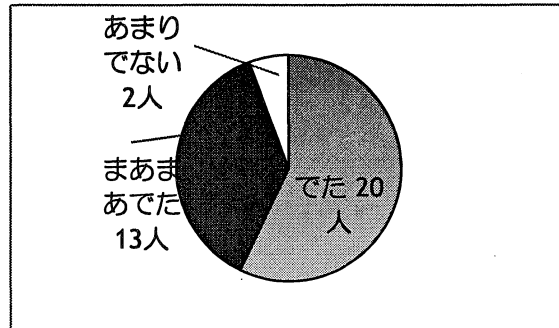


図3 勉強会に対する意欲

④講義型勉強会と参加型勉強会ではどちらに参加しやすいか、「参加型勉強会」24人

理由→他の人の知識が共有できる・アクティビティを使うので楽しく学べる・自分の分からないところが明らかになる・一方的でなく自分で考えて学べる。

「講義型勉強会」7人

「どちらでもよい」4人 (図4)

理由→聞くだけで参加できる・参加型だと、意見を出したり、事前学習したりプレッシャーがあるが、講義では聞いているだけでよい・らく・新しい事を勉強するなら講義型がよい。

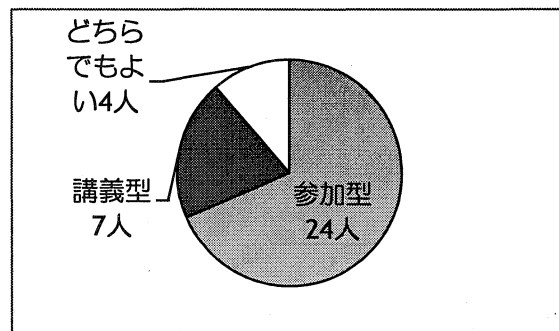


図4 参加のしやすさ

<考察>

今回試みた参加型勉強会は、参加者主体となるように参加者同士が意見交換やお互い知識の共有ができるように、アクティビティやデ

イスカッションを取り入れて実施した。

ジャック・メジローは教育においては「物の見方」を学習者自身が「問い直し」「変えていく」ことが重要であると述べており、自らの「物の見方」を振り返るためにも、他者との意見交換や経験共有が必要になる<sup>1)</sup>と述べている。学ぶということは“習って行うこと”であり知識を持っている人から聞くだけではなく、自分の知識と経験を生かし、学習したことを実際に活用できて初めて学んだということである。参加者が主体性を持ち勉強会に参加でき、聞くだけではなく実際に体を使い、他の参加者とディスカッションをしたことで、内容がイメージでき頭に残りやすかった。そのことが個々の学習意欲の変化につながったのではないかと考える。

また、M. ノールズは“学習者は「自己主導的である」”、もうひとつは“教育者は「学習援助者である」”<sup>2)</sup>と述べている。

参加者主体となる勉強会を行うことで個人の主体性を養うことが出来る・他の参加者と自分との関わりを意識するようになる。

しかし個人の性格や、知識などにバラつきがあることで、グループ内で一人が一方向的に意見を述べる、ディスカッション不足になるというデメリットがあるということにも気付いた。そのため参加者主体に重点を置きすぎるのではなく、主催者は、参加者の学びやすい環境や雰囲気作りも配慮する必要がある。

勉強会の形式については、参加型勉強会の方がよいといった意見が多くきかれた。しかし、個人の性格や新しいものを学習する時などは講義型の勉強会のほうが学びやすく吸収しやすいため、講義型の勉強会も取り入れながら実施する必要がある。

今回参加型勉強会を試みて参加者が主体となり勉強会を進めていくことで内容がイメージしやすく他の参加者との意見の共有ができ、勉強に対する意欲が高まったという意見が多かった。しかし日々の看護ケアに活かしてい

るかどうかは今の段階では評価し難い。そのため今後の看護ケアに活かすことが出来るよう勉強会を継続していく必要がある。

#### <結論>

- ・参加型勉強会は、積極的に他の学習者の意見や発想を受け入れ、共有し学べる。
- ・アクティビティやディスカッションを取り入れる事で勉強内容に興味・関心が持てイメージ化しやすい。そのため、勉強に対する意欲が高まる。
- ・学習しやすい雰囲気作り、個人の性格を配慮した環境を整え継続していくことが重要である。
- ・内容に応じて講義型の勉強会が良い場合もある。

#### <引用・参考文献>

1) ジャック・メジロー: Learning to think like an adult, Mezirow & Associates, Learning as Transformation: Critical Perspectives on a Theory in Progre

2) M・ノールズ: 『成人教育の現代的実践—ペダゴジーからアンドラゴジーへ』(2002) (堀薫夫, 訳) 鳳書房 (Knowles, M. (1980). *The modern practice of adult education: 2010* 『リテラシーズ』7, くろしお出版 From pedagogy to andragogy. Upper Saddle River, NJ: Cambridge Adult Education

3) H・ガードナー: MI:個性を生かす多重知能の理論 (2001 新曜社) 松村暢隆: 訳